

近代化過程での「和室」という室名呼称の創出と配置領域についての研究

On Origin of the Term “Wa-shitsu” and Planning in the Modern Period

○西村幸太^{*1}, 郡司颯^{*1}, 柴田建^{*2}, 鈴木義弘^{*3}NISHIMURA Kota^{*1}, GUNJI Sou^{*1}, SHIBATA Ken^{*2}, SUZUKI Yoshihiro^{*3}

“Wa-shitsu” : The Japanese traditional space finished by “Tatami” in housing planning is decreasing nowadays remarkably and the value is must be recognized reasonably. This research tries to suggest the origin of the term “Wa-shitsu” and the process of generalization in usual. We recognized the term “Wa-shitsu” was produced in the early of 1900’s, and “Nihon-ma” (it means Japanese-style-room) described before in about 1930’s. Then it’s maybe that popularization of this term was in after the 2nd World War.

キーワード : 和室, タタミ, 板の間, イス坐, ユカ坐

Keywords: *Wa-shitu, Tatami, Western-style Room, Chair-seating Style, Floor-seating Style*

1. 研究の背景と目的

これまでの筆者らの現代住宅平面構成の変容および室要求構造の研究を通じて、「和室」の存否やとられ方が重要な着眼点であるとの認識に至っている^{文¹・³}。かつては住宅の「和室（座敷）」が最重要の居室として位置づけられていたが、次第にリビングルームや生活成員の私室の優先度が高まり、「和室」は補助空間化しているという見方ができ、さらには近い将来には消滅するのではないかという観測も広く語られている。その反映として、例えば日本建築学会では、2016 年度に「日本建築和室の世界遺産的価値特別調査委員会」が設置され、領域横断的な立場からの「和室」の再評価が行われており、その議論の成果も出されている^{文⁴・⁶}。また、本年 3 月に閣議決定された新たな「住生活基本計画」では、「和の住まいを推進」することが基本的な施策のひとつに挙げられることとなった。

引き続き、広汎な観点から「和室」に関する研究が幅広く取り組まれることと期待されるのであるが、そもそ

も「和室」という概念は一義的には規定しがたいともいえる。その前提で、本稿では、今やごく一般的となっている「和室」という呼称が、いつの時期に登場し、どのような条件下で用いられはじめたのか、その歴史的な背景を考察することは不可欠で、本研究はこれを明らかにすることが目的であり、これからの和室論の観点のひとつとして提起をしたい^{注¹}。

2. 研究の概要と方法

まず「和室」呼称は、日本住宅の近代化の過程で創出されたものと仮定し、その考察のための足がかりとして、大正から昭和初期にかけて住宅改良会によって刊行された住宅専門誌である雑誌『住宅』（1916-1943 年）^{文¹⁰}の掲載図面を分析の対象とした。同誌は周知のように、日本住宅の西洋化を積極的に推進するため設計施工会社「あめりか屋」を設立した橋口信助の主導により、伝統的な日本住宅の改良を志向した事例が掲載されている。なおかつ、月刊誌として、臨時増刊をのぞいても計 325 号

*1 大分大学 大学院 工学研究科 博士前期課程

*2 大分大学 理工学部 創生工学科 准教授・博士 (工学)

*3 大分大学 理工学部 創生工学科 教授・博士 (人間環境学)

Graduate School of Eng., Oita Univ.

Associate Professor, Architectural Division, Oita Univ., Dr.Eng.

Professor, Architectural Division, Oita Univ., Ph.D

が継続的に刊行され^{注2)}、この間の経時的な変化をとらえるには、最も相応しい史料であると判断したためである。そのなかのタタミ敷きの居室（以下、タタミ室）を抽出し、「和室」の表記に着目して、どのような条件下で「和室」表記が用いられていたかについて、その他のタタミ室の室名表記や配置の領域（「ハレ」の空間か「ケ」の空間か）についての分析を行った。

つづいて、雑誌『住宅』の考察を補完するため、その刊

行期間およびこれと前後する明治期から昭和初期にかけての住宅平面図集や住宅計画に関して論じられている主要な文献を渉猟し、その中に見いだされる掲載図面や解説・評論文の記述を精査した。また、家政学分野における論考についても調査を行った^{注3)}。さらに、当時の代表的な建築家・建築組織により設計され、現代でも知られている住宅作品の室名表記についても対象とした^{注4)}。

表1 タタミ室の「日本間・和室」表記の推移

西暦	雑誌『住宅』掲載図における表記件数				関連文献・史料における表記			特記事項	
	掲載図面件数	タタミ室のある件数	「日本間」表記	「和室」表記	小計	「日本間」表記	「和室」表記	社会情勢	建築関連事項
1910						●『虞美人草』夏目漱石・1907	●『家事実習教科書』宮川寿美子		○橋口信助「あめりか屋」設立・1909
1911							■松平邸（清水組）		○「我国将来の建築様式を如何にすべきや」建築学会
1912							■柴井松平邸（清水組）		○大阪市公会堂設計コンペ
1913						■柳沢伯爵邸（清水組）	■根津邸（清水組）		
1914								第1次世界大戦 開戦	
1915									
1916	14	6			0				
1917	62	32			0		■王子洪沢邸 ガーデンハウス（清水組）		○山本拙郎「あめりか屋」入社
1918	57	7			0			第1次世界大戦 終戦	
1919	34	12			0				○「生活改善展覧会」文部省
1920	44	19			0				○「分離派建築会」結成
1921	56	15	4		4				○「生活改善同盟会」設立
1922	143	59	2		2				○「文化学院」創設 ～大正自由教育運動
1923	57	24	3		3	●『最新住宅建築』保岡勝也		関東大震災	○平和記念東京博覧会
1924	52	29	8		8				○「同潤会」設立
1925	59	28	1		1				
1926	81	24	2		2				
1927	55	18	1		1			昭和金融恐慌	○『日本の住宅』藤井厚二
1928	38	18	0		0				○「日本インターナショナル建築会」設立
1929	72	38	2		2	●『中流和洋住宅』主婦之友社		世界大恐慌	○橋口信助逝去
1930	75	40	2		2				○山本拙郎「あめりか屋」社長就任
1931	88	63	2	1	3			満州事変	○『過去の構成』岸田日出刀
1932	145	64	2	6	8			上海事変	○山本拙郎「あめりか屋」社長退任/西村達次郎就任
1933	163	95	3	6	9	●『建築博覧会 住宅設計図案』建築資料協会			○タウト来日
1934	152	105	2	3	5	■川崎邸（A. レーモンド）			
1935	204	129	1	8	9	■谷口邸（谷口吉郎）			○『辞苑』：「和室」「日本間」の掲載なし
1936	155	133	3	3	6	■日向別邸（B. タウト） ■山田邸（山口文象）			
1937	129	92	3	10	13	■馬場島山別邸（吉田鉄郎）※註	■小林邸（山口文象）	日中戦争	
1938	121	81	2	1	3				
1939	127	89	2	2	4			第2次世界大戦 開戦	○『日本美の再発見』タウト
1940	137	78	1	3	4				
1941	164	108	0	0	0			太平洋戦争 開戦	○「住宅営団」設立
1942	128	86	1	0	1	■飯箸邸（坂倉準三）			
1943	63	18	0	0	0				
小計	2,675	1,510	47	43	90				
1945～1975						■志賀邸（谷口吉郎）・1955	■森邸（清家清）・1951 ■正面のない家-H（西沢文隆）・1962 ■田宮邸（吉村順三）・1965 ■穴戸邸（鈴木尚）・1966 ■まつかわぼっくす（宮脇隆）・1971 ■猪熊邸（吉村順三）・1973 ■成城の家（篠原一男）・1974		○住宅金融公庫住宅平面図集 刊行・1951 ○『広辞苑 初版』1955 ：「和室」「日本間」の項を掲載

<凡例> ■：設計図中の表記 ●：説明・評論での表記 ※註：最終図面では「日本間」だが、エスキス段階で「和室」の表記あり

3. 雑誌『住宅』における「和室」呼称の考察

3-1. 掲載図面の「和室」表記について

雑誌『住宅』には、2,675 件の住宅平面図が掲載されている。このうちタタミ室をもつ戸建住宅^{注5)}は 1,510 件 (56.4%) で^{注6)}、これが本章での分析対象である。すなわち、同書では、タタミ室をもたない住宅が 4 割以上を占めているが<表 1 : 左欄>、1920 年代までは 5 割以上であったのに対して、1930 年以降では、4 割を下回っている。橋口の逝去 (1928 年)、後任である山本拙郎の早期の社長退任 (1931 年) に加え、満州・上海事変 (1930-31 年) などの社会情勢が少なからず反映されているのかもしれない。

まず、タタミ室がどのように呼称されていたかについては、伝統的な室名としては「座敷」「次の間」「茶の間」「納戸」などが挙げられるのだが、利用者や用途を明示した「寝室」「子供室」「老人室」「客間」「女中室」などの主体行為系をあらわす室名もあり、これらを総称して「在来名称」とする。また、以前から居室をタタミの枚数であらわす「帖数表記」も用いられている。

さて、同誌において初めて「和室」という表記がみられるのは<表 1 : 左欄>、発刊から 15 年後の、1931 (昭和 6) 年 11 月号で、大林組設計部設計により兵庫県神戸市鈴蘭台に竣工し、誌上小住宅展覧会として掲載されて

いる「第貳號小住宅」<図 2>で、その後は、ほぼ途絶えることはないが事例数は多くはなく、43 件にとどまっている。

また、「和室」より 10 年先行して「日本間」という室名が登場している。1921 (大正 10) 年 6 月号に掲載された 17 坪の「田中邸」が初出で、47 件と少数ながら確認でき、両者を合わせて 90 件 (タタミ室をもつ住宅数の 6.0%) であった。

これ以降の記述においては両者を一括して述べる場合には「和室・日本間」とする。

3-2. 「和室・日本間」表記と他の居室の相互関係について

①板の間と「和室・日本間」表記の関係

分析対象の 1,510 件のうち、すべての居室がタタミ敷きで、すなわち、板の間の居室 (端的には「洋室」^{注7)}) をもたないものが 334 件 (22.1%) であるが、このうちで「和室・日本間」表記の事例 90 件に限るならば 1 件にししか認められない<表 2>。いいかえるなら、板の間の居室 (洋室) を設ける場合に、これと対比することが「和室・日本間」という表記を促す要因のひとつであったということができる。

②この時期のタタミ室名称の特徴

まず、ここで、「和室・日本間」以外の表記について述べる<図 1>、特徴的な点は以下のとおりである。

表 2 板の間の有無とタタミ室の表記

	板の間		タタミ室の表記				合計 (構成比,%)
	あり	なし	日本間	和室	在来名称	帖数表記	
日本間・和室 表記なし	738	135			○		1,419 (93.9)
	161	140				○	
	187	58			○	○	
小計	1,086	333	0	0	1,118	546	
日本間 表記あり	16	0	○				47 (3.1)
	25	0	○		○		
	2	0	○			○	
	4	0	○		○	○	
小計	47	0	47	0	29	6	
和室 表記あり	12	0		○			43 (2.9)
	28	1		○	○		
	1	0		○		○	
	2	0		○	○	○	
小計	43	1	0	43	31	3	
合計	1,176	334	47	43	1,178	555	1,510

凡例：○ 室名称の居室あり

表 3 「在来名称」表記されている室名称

	居間	女中室	茶の間	客間	次の間
件数	672	655	500	421	334
構成比 (%)	44.5	43.3	33.1	27.9	22.1
	座敷	寝室	子供室	納戸	予備室
1,510	228	212	164	101	101
100.0	15.1	14.0	10.9	6.7	6.7

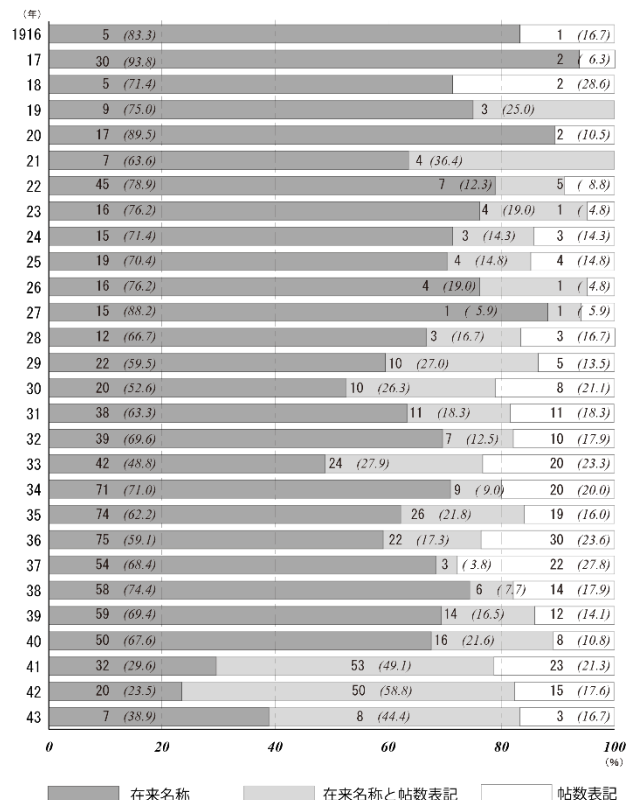


図 1 雑誌『住宅』におけるタタミ室表記の経年変化

は、または「日本建（の家）」という語句を用いている。

以上をつなぐと、次第に「和室」という表現にいたる経時的な流れがあるととらえることができるのである。

②建築作品集・住宅論における表記

前述した雑誌『住宅』における「和室・日本間」表記よりも早い時期に見いだせるのが、清水組の設計による「松平邸」^{文15)}で、竣工は1911年の事例である。玄関脇に応接室（洋室）をもつ豪華な日本家屋で、1階の奥まった位置にある6帖間と2階階段脇の3帖間の予備室的な2室が「和室」と書かれている。これにつづく「染井松平邸」（1912年）、「根津邸」（1913年）、「王子渋谷ガーデンハウス」（1917年）にも「和室」という表記があり、先駆的な用例である。渡航経験の豊富な技師・田辺淳吉（1913年からは技師長）の建築観の影響が大きいものと推察することができる。

また、保岡勝也は『最新住宅建築』^{文16)}において、「日本間」という呼称が、文中や図版説明として各所で用いられており、1事例ではあるが「某実業家邸」（1923年）〈図4〉において「和間」という表記が認められる点は特記しておきたい。しかし、保岡が自身の作品紹介も兼

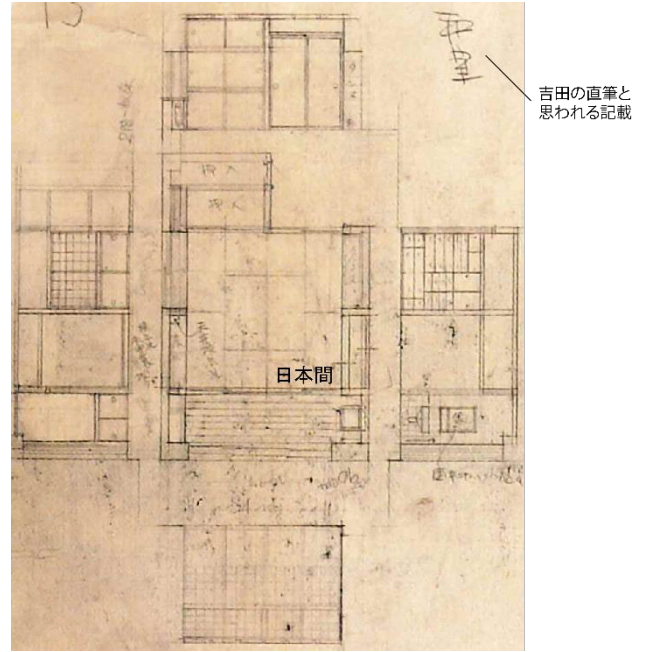


図6 「馬場烏山別邸」のエスキス

出典：国立近代建築資料館編『吉田鉄郎の近代—モダニズムと伝統の架け橋』
 <2019年> ※図5-⑥ 破線囲み部を参照

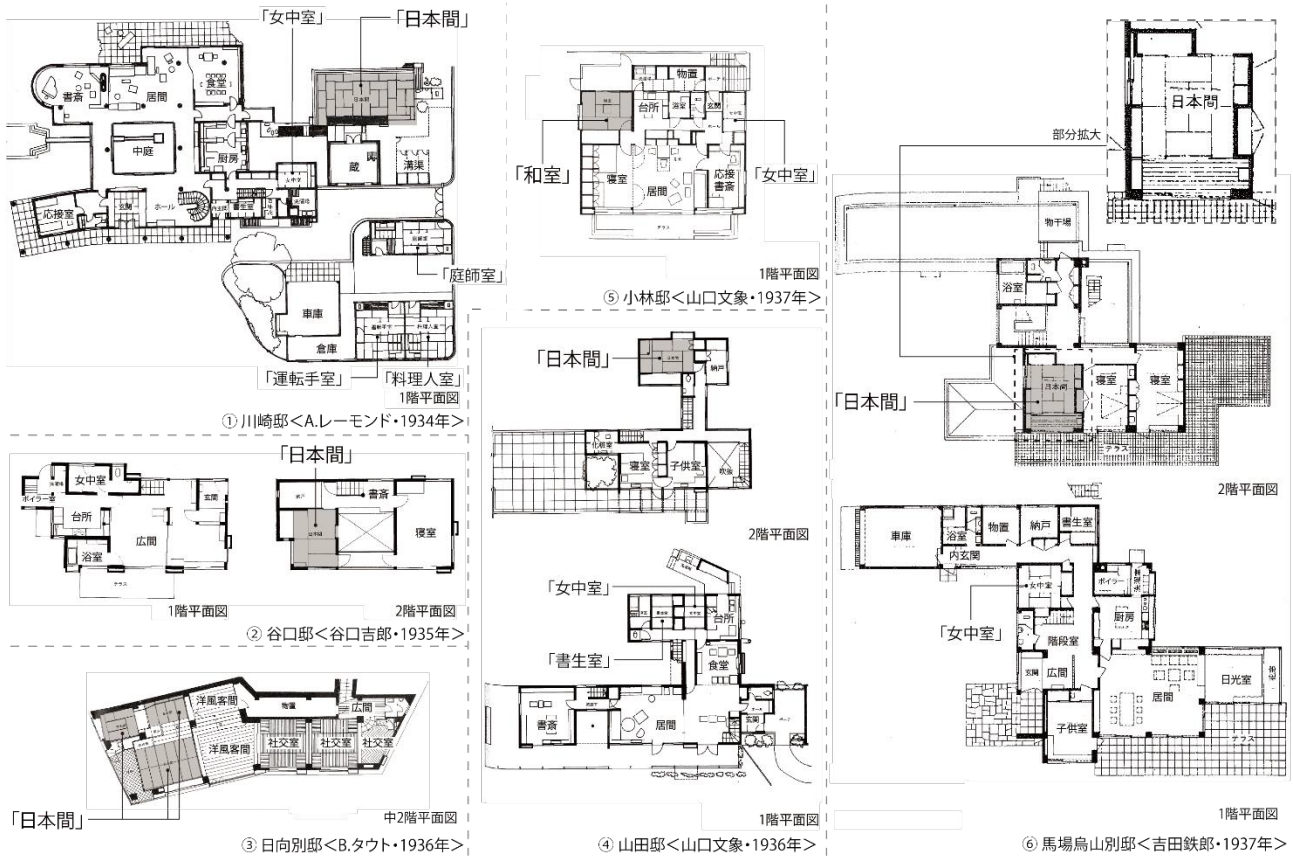


図5 建築家における「和室・日本間」表記の事例

出典：新建築臨増『昭和住宅史』^{文19)} ※室名は可読サイズに変更

ねたその後の著作である『欧米化したる日本小住宅』（1924年）・『日本化したる洋風小住宅』（1924年）の平面図では、タタミ室は「帖数表記」あるいは居室名の添え書きとして「タタミ敷き」という注記するにとどまっている。

つづいて、刊行された主婦之友社『中流和洋住宅』（1929年）^{文17}、建築資料協会『建築博覧会 住宅設計図案』（1933年）^{文18}でも「日本間」の表記が確認することができた^{注8}。

さらに、現代においても広く知られる当時の住宅作品についても敷衍すると、やはり「日本間」表記が先行する。A.レーモンドの川崎邸（1934年）<図5-①>、「谷口吉郎自邸」（1935年）<図5-②>、タウトの日本での唯一の作品「日向別邸」（1936年）<図5-③>など、1930年代に頻出する。山口文象による「山田邸」（1936年）<図5-④>でも「日本間」と書かれているが、翌年に竣工した「小林邸」（1936年）<図5-⑤>では「和室」表記にかわっている点が注目される。さらにこの同年の、吉田鉄郎「馬場烏山別邸」<図5-⑥>の最終図では「日本間」と記入されているのだが、彼の自筆と思われるエスキスには<図6>、「和室」とスケッチが残されている^{文20}のである。

4. 「和室」と表記された居室の性格

4-1. 「和室・日本間」の規模と配置の領域との関係

「和室・日本間」表記の発祥と経年の推移を示したのだが、どのような空間に「和室」は用いられたのか。すなわち、「和室・日本間」と呼称された居室は、従来の「座敷」「応接間」「客間」などに代わるものとして「ハレ」の空間に配置されていたのか、「寝室」や予備室的な居室に用いられた「ケ」の空間に配置された補助的な

呼称であったのか、また、それに先だって「和室・日本間」と呼称された居室と規模に関係はあるのか、などについて明らかにせねばならない。分析は、改めて雑誌『住宅』に掲載された平面図が対象である。

「和室・日本間」表記の90件のうち、用途が特異な4件^{注9}を除く86件について、その配置が「ハレ」の領域なのか、家族生活空間の近傍の「ケ」の領域であるのか、明確な区別が困難なものは「中間領域」^{注10} <図7>として3タイプに分類を行った<表4>。

ひとつの住戸に「和室・日本間」呼称が1室の事例は61件（70.9%）あり、複数室に表記がある事例を含めると居室数では135室となる。このうち、「ケ」の領域に配置されているのが80室（59.2%）にのぼり、広さ6帖未満の38室にしばってみると、そのうちの30室（78.9%）が「ケ」の領域配置である。この点でみるならば、「在来呼称」に対して、「和室・日本間」は用途が不明確な居室に対しての予備的な呼称の性格が強かったといえる。

4-2. 配置領域と他のタタミ室の有無

前項の考察をより詳細に分析するため「和室」以外のタタミ室を、まず①「接客空間」、②「共用空間」、③「私室」、④「補助空間」に分類^{注11}し、その組合せを以下のように4類型して、「和室・日本間」の配置領域と規模についての相関をとらえたく<表5>。

- Type1：①+②もしくは③+「和室・日本間」
- Type2：①+「和室・日本間」
- Type3：②もしくは③+「和室・日本間」
- Type4：「和室・日本間」のみ

Type4が半数以上（48件）を占めるが、一方で様々なタタミ室を有するType1も2割程度（17件）存在した。また、上記のうち、傾向を異にするのは、Type1で、おおむね「和室・日本間」は「ケ」の領域に配置されている。

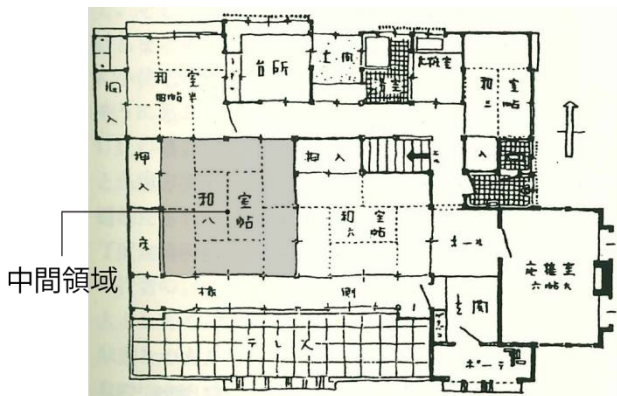


図7 中間領域の事例
「阪急電鐵經營・園田住宅圖譜」

出典：雑誌『住宅』<1937年3月号> ※2階省略

表4 「和室・日本間」の配置領域×居室の広さ

		居室の広さ					住戸内の「和室・日本間」居室数			合計 (%)
		4.5帖未満	4.5~6帖未満	6~8帖未満	8帖以上	読取不能	1室	2室	3室~	
和室・日本間数(室)	ハレ	4	19	12	1		19	5	12	36 26.7
	中間	1	3	7	8		9	5	5	19 14.1
	ケ	19	11	21	21	8	33	22	25	80 59.2
	合計 (%)	20 14.8	18 13.3	47 34.8	41 30.4	9 6.7	61 45.2	32 23.7	42 31.1	135

①「接客空間」と、②「共用空間」あるいは③「私室」のいずれかが設けられているので、伝統的なタタミ室は依然として、「座敷」・「次の間」・「茶の間」・「女中室」などに序列化がされており、そこに「和室・日本間」を表記する場合には、自ずと補助的・補完的、いいかえるならば、床面仕上げ材料を表記するために用いられたものであるといえる。これに対して、Type2-4 においては、「和室・日本間」と名づける居室の位置づけには選択の余地がありタタミ室をどの領域に残すか、「ハレ」か「ケ」かのいずれか択一的に決められたのではないかと考えられる。

5. 「和室」という語が創出された時代背景の補記

20 世紀初頭の社会情勢に伴う建築界の動きも考察に加えるべきであろう<表 1 : 右欄>。

近代小説において「日本間」が使用されている例としては、夏目漱石「虞美人草」(1907年)を挙げることがで

き、近代日本住宅は、住生活の合理化が図られながら変容をとげてきた^{文 21)}が、先見的・開明的な建築専門分野における多くの計画論や日本建築様式論争などをへて、また、日露戦争、第 1 次大戦などの世界情勢の影響(例えば、平和記念東京博覧会・1922 年)を受けて中流住宅に西洋化が浸透するのは、自由教育運動^{注 12)}(例えば、西村伊作らによる「文化学院」^{注 13)}の創設・1921 年)なども活発となった大正期以降からであったであろう。

「洋」に対して「日本」「和」が強く意識されはじめ、関東大震災(1923 年)の復興や、ブルーノ・タウト来日に象徴される日本の伝統建築再評価の機運も、新しい概念の創出を促したのではないかと。

また、一般に普及しつつあったことを裏付けるものとして、言語の辞典を挙げることができる。1955 年に刊行された「広辞苑 初版」において、「和室」「日本間」^{注 14)}が掲載されている。その前身である博文館の「辞苑」(1935 年)においては記載されておらず、この間に語句が社会的に定着したと推察することができる。

表 5 「和室」の配置領域×他のタタミ室の有無

	①	②	③	④	日本間 和室 (件数)	配置領域			「和室」の大きさ (室数)			
	接客 空間	共用 空間 家族生活空間	私室	補助 空間		ハレ	中間	ケ	4.5帖 未満	6 帖 未満	8帖 以上	読取 不能
Type 1	●	●	●	●	1	●			1			
接客空間① + 家族生活 空間 ②・③ + 「和室」	●	●	●	●	1		●		1			
	●	●	●	●	1		●		1	1		
	●	●	●	●	2		●		2	5	2	
	●	●	●	●	3		●		1	1	1	1
Type 2	●			●	5	●			2	3		
	●			●	2	●			1	1		
	●			●	4		●		2	1	3	1
	●			●	1	●						1
接客空間① + 「和室」	●			●	1	●						1
	●			●	1	●						1
	●			●	1	●						1
	●			●	1	●						1
Type 3		●		●	1	●						1
		●		●	1	●						1
		●		●	1	●						1
		●		●	2	●			2	1	1	1
家族生活 空間 ②・③ + 「和室」		●		●	1	●						1
		●		●	1	●						1
		●		●	2	●				1	1	1
		●		●	1	●				1	1	1
Type 4				●	3	●				3	4	
				●	4	●			1	3		
				●	3	●				1	2	
				●	12	●			1	1	5	9
				●	1	●			1	1	2	
				●	7	●			1	6	7	7
				●	4	●			1	7	3	1
				●	1	●				2	2	1
				●	11	●			1	1	2	6
				●	22	●			1	10	29	26
				●	48	●			11	10	29	26
合計	30	15	13	50	86	30	15	56	20	18	47	9

凡例

● : 居室あり ** : 1%水準有意

① : 接客空間 ② : 共用空間 ③ : 私室 ④ : 補助空間

6. 総括

「和室」の概念・定義は、その要否を含めて今後の課題にゆだねるとして、本研究において、まずはその呼称・表記についての起源をたどった。さかのぼると、1910 年の宮川寿美子(大江スミ)の論考にたどりつき、また、設計図面では、その翌年 1911 年の清水組による「松平邸」での表記が見いだせた。もちろん、当時の日本建築様式論争の最中では、もっと早い時期に言葉としては口にされていたであろう。

普及の観点では、雑誌『住宅』や後世に残る住宅作品それぞれにおいては時代的な前後は生じるのだが、まずは「日本間」という表現が大正期からそれ以降に広がり、つづいて「和室」という呼称に引き継がれたものであることを示した。

そもそも機能ではなく、しつらえによって室名が呼称された日本住宅であるので、「和」室は機能面で規定されるのではなく、「洋」室の対として用いられはじめたのであろう。その根拠として、洋室(板の間)が設けられた住宅の場合において、「和室・日本間」の表記が顕著に増大することである。ただし、その場合でも居室の性格は、いわゆる機能論としての公私いずれか一義的であったとはいえ、とりわけ、住戸にタタミ室が複数あり、接客領域や家族生活領域にも「在来呼称」のタタミ室が設けられた場合には、「和室・日本間」と呼称された居

室の多くは補助的な「ケ」の空間であった。一方、タタミ室が1室のみで「和室・日本間」と表記されている場合、「ハレ」の領域のタタミ室を呼称する比率が高いことからみれば、建築主や設計者によって「ハレ」か「ケ」の領域かが択一的に決められ、どちらか一方に特定される傾向はなかった。

現代では、一般的に「和室」という表現が定着するにいたっているのだが、それは戦後しばらく経過してからであろうことが推察できる。

本稿では、「和室」という室名について考察を行ったが、これにとどまらず、タタミ室がどのように呼称され、これが変容しているのかについて究明することが次の課題である。

◀ 補注 ▶

- 1) 本稿の一部は、日本建築学会において公表している研究梗概^{文7)}・⁹⁾を再編して加筆修正している
- 2) 雑誌『住宅』は、1923年11,12月号(関東大震災の影響)、1931年5,6月号(出版費用の問題)の計4度の欠号があった。
- 3) 家政学文献を調査するため、本研究では「家政学文献集成」^{文11)}に依拠した。
- 4) 著名な住宅作品は後年の出版物においても繰り返し紹介されるのだが、室名表記は改変ないしは追記されている懸念がある。本研究では、原設計での表記に忠実であると判断される事例を考察の対象としている。
- 5) 戸建住宅を対象とするため、貸家や社宅、アパートなどの共同住宅については分析対象から除外する。しかし、一部の貸家や社宅に戸建住宅がみられるが、これらは分析対象とする。また、海外の事例も除外した。
- 6) 分析対象外とした1,165件は、板の間居室のみで構成される事例、平面図の一部を抜粋したもの、もしくは集合住宅を含む。
- 7) 在来の住宅において、台所などは板の間である。これについては対象からのぞいている。
- 8) 『中流和洋住宅』(1929年)では、二十六坪の模範的西洋館の紹介文において、「これ(平面図の畳敷きの「寝室兼居間」を示す)は八畳の日本間です。」と、また、『建築博覧会 住宅設計図案』(1933年)においては、平面図上のタタミ敷きの居室(老人室、居間、茶の間、子供室)に対して、「洋間は應接室きりであとは在来の日本間ですが中々よくその配置が試みられて居ります。」と文章中で記述されている。
- 9) 「日本間・和室」を有する90事例から、用途が特異な事例4件(娯楽施設1件、宿泊施設1件、離れ2件)を分析対象から除いた86件の平面構成を分析する。
- 10) 領域の区別困難な事例を「中間領域」として考察に加えているのは、「ハレ・ケ」のいずれの場合も、住まい方によって、居室の用途が大きく影響される事例として大いに着目すべきであると考えたためである。
- 11) 座敷や客間、床の間を設けない居間などを接客空間、茶の間を共用空間、寝室や床の間を設けない居間、子供室などの主室を私室、女中室や書生室、予備室などを補助空間として分類を行う。
- 12) 1920年代～1930年代前半にかけて、欧米で活発化した新教育の影響を受け、文部省の教師中心主義の教育を批判し、子どもたちの関心を中心としたより自由な教育の創造を目指した運動。

- 13) 国の教育方針や行政に拘束されない独自の教育理念と自由を尊重し、一般の大学・短大制度とは一線を画しつつ、高度な水準の文化・芸術の高等教育を行う専修学校を目指し、1921年に西村伊作らによって創設された。
- 14) 同書によれば、「和室：日本間 / 日本間：日本式の室。畳の敷いてある室。←→ 洋間。」と説明されており、他の主要出版社から発行されている国語辞典においても、戦後から現在まで、おおむね同様のである。

◀ 参考・引用文献 ▶

- 1) 切原舞子・岡俊江・鈴木義弘：現代独立住宅における座敷の使われ方と存在意義について 現代における住宅計画のための室要求構造の解明に関する研究 その2, 日本建築学会計画系論文集, 第643号, pp.1951-1960, 2000.9
- 2) 拙稿:現代住宅平面構成の変容に関する研究 第1-12報, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2010-2019 ほか
- 3) 湯浅裕樹・鈴木義弘・岡俊江・切原舞子:多様化の時代における分譲独立住宅平面構成の経時的比較分析, 日本建築学会計画系論文集, 第690号, pp.1723-1732, 2013.8
- 4) 「和室」の日本建築における価値を改めて問い直す, 2018年度日本建築学会パネルディスカッション資料 (2018.9)
- 5) 日本建築学会編：日本建築和室の世界遺産の価値特別調査委員会報告書, 2019.3
- 6) 松村秀一・服部岑生編：和室学 世界で日本にしかない空間, 平凡社, 2020.10
- 7) 西村幸太・西田航・柴田建・鈴木義弘：和室に着目した近代日本住宅の室名呼称の変容について -雑誌『住宅』に掲載された平面図の分析 第1報-, 日本建築学会九州支部研究報告, 第59号, 日本建築学会, pp.253-256, 2020.3
- 8) 西村幸太・永田一星・柴田建・鈴木義弘：住宅金融公庫平面図集におけるタタミ室名称の表記について, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.23-24, 2020.9
- 9) 西村幸太, 郡司颯, 柴田建, 鈴木義弘：タタミ室の名称の変容に関する研究 -和室呼称の発生・普及・定着についての考察-, 日本建築学会九州支部研究報告, 第60号, pp.125-128, 2021.3
- 10) 内田青蔵監修：復刻版・雑誌『住宅』第1-52巻, 柏書房, 2001-2003
- 11) 田中ちた子・田中初夫編：家政学文献集成 明治期 I-VIII, 渡邊書店, 1968-70
- 12) 宮川寿美子：家事実習教科書, 元元堂書房, 1910.7
- 13) 下田歌子：家政学 下, 博文館, 1893.4
- 14) 塚本は満子：実践家政学講義, 積文社, 1906.1
- 15) 清水組設計部：設計図集 住宅ノ巻 自1907年至1923年, 1929
- 16) 保岡勝也：最新住宅建築, 鈴木書店, 1923.6
- 17) 主婦之友社編集部：中流和洋住宅集, 主婦之友社, 1929.3
- 18) 建築資料協会：建築博覧会・住宅設計図案, 建築資料協会, 1933.5
- 19) 新建築社：新建築臨時増刊号『昭和住宅史』, 新建築社, 1976.11
- 20) 文化庁国立近代建築資料館編：吉田鉄郎の近代モダニズムと伝統の架け橋, 文化庁, 2019.11
- 21) 青木正夫ほか：中廊下の住宅 明治大正昭和の暮らしを間取りに読む, 住まいの図書館出版局, 2009.3